人間のおごり

写真は 2014 年 10 月に亡くなられた坂本義和先生の遺稿集（岩波書店、2015 年 6 月）である。昨年 9 月 18 日にレポートした。「戦争法案」が参議院特別委員会で強行採決された翌日だ。先生が『世界』2011 年 5 月号「生きよう！」に書かれた表題の論文も、遺稿集に収められている。今日はあれから 5 年。もう一度読み返した。

3 月 11 日、最初のゆれが来た時、私は何かいつもの地震と違う異常を感じ、家から飛び出した。大地の横揺れがひどく、立っていられない。庭に降りる階段の鉄の柱につかまって身を支えていると、庭木が小枝にいたるまで揺れ動いている。これまでに経験したことのない地震だ。とっさに頭をよぎったのは、怒った自然の前で、自分がこんなに小さく無力な存在なのかということだ。すぐに思ったのは、「環境保護」という言葉が、いかに人間中心の観念か、だった。環境を人間が保護するのではなく、自然環境が人間の生存を保護してくれてきたということだ。「地球にやさしく」というスローガンは無意識の人間のおごりであって、人間に対して、生殺与奪の力を持つ「地球がやさしく」してくれる時に、人間は生きていられるのだという直感である。

そこに折り重なるように、原発の崩壊のニュースが入ってきた。火災、爆発、大量の蒸気の上昇、どれもチェルノブイリを連想するような不気味な事態だ。いちばん驚くのは、次々と登場する「専門家」も東電も、「中で何が起こっているか、よくわからない」「計器が故障している」などと言う以外にないという事実である。これまで何度も「事故」を起こしてきたにもかかわらず、「専門家」は、事故防止のために何をしてきたのか。東電は、独占企業として、危険を隠蔽してきたのではないか。

原発は、もともと自然界に存在しないウラン 235 を原材料とするという点からして、根本的に自然に逆らう、おごりの発想の産物なのだ。自然界の、あらゆる報復は「想定内」のはずだ。放射性物質の降下の範囲が広がり、飲食物を汚染することは、第五福竜丸事件を経験した日本では、当然「想定内」のことだ。

21 世紀の人類は、これまでの「先進国モデル」を誰もが追求することで生きていけるのか。それとも自滅するのか。日本国民は、人間のおごりの上に成り立つ、今の生き方、生活様式そのものを改革して、世界的格差のない人類共有となりうる「モデル」を創る道を探る時ではないか。今回の天災と人災とが、それを、われわれに問うているのだ。

（2016 年 3 月 11 日）